

<目次>

序章	1
第1節 研究の目的と問題提起	
1 本研究の動機	
2 本研究の課題と目的	
第2節 先行研究と本研究の位置づけ	
第3節 本研究の範囲と方法	
第1章 沖縄戦から琉球大学設立に至るまで（前史）	24
第1節 軍による沖縄軍政準備	24
1 軍政研究の本格化	
2 陸軍による軍政要員の育成	
3 海軍による沖縄軍政研究、要員の育成	
第2節 米国文化人類学と沖縄軍政	39
1 『民事ハンドブック』の沖縄人観	
2 軍事プロパガンダに用いられた沖縄地域研究	
3 民主化の旗手としてのマードック	
4 自己確認の方法としての文化人類学	
第3節 米国の対沖縄パブリック・ディプロマシーがめざしたもの	60
1 米国のグローバルなパブリック・ディプロマシー展開	
2 1945年から1947年までの対沖縄パブリック・ディプロマシー	
3 1948年から1951年までの対沖縄パブリック・ディプロマシー	
第2章 琉球大学の設立	88
第1節 琉球大学創設の政策的意図	88
第2節 琉球大学の設立	94
1 放置されてきた沖縄の高等教育	
2 設立をめぐる3つのイニシャティブ	
3 琉球大学の開学	
4 根拠法からの米軍政の政策意図分析	
5 開学式典からの分析	
6 パブリック・ディプロマシーの国際比較からの分析	
第3節 冷戦と米国の大学	125
1 ミシガン・ミッションの概略	
2 米国連邦政府と巨大科学技術をつなぐ大学	
3 ミシガン州立大学を台頭させた学長の戦略	
4 冷戦を利用した大学	

第3章 「抵抗の拠点」としての琉球大学（前期ミシガン・ミッション） .....	155
第1節 イデオロギー冷戦時代の米国パブリック・ディプロマシー .....	155
1 1950年代 米国の世界戦略	
2 USIAの世界展開と琉米文化会館	
第2節 英語か日本語か：揺れるアイデンティティー .....	164
1 為政者たちの憂慮	
2 「英語帝国主義」	
3 沖縄側の日本語「国語」論	
4 「国文学科」不許可	
5 優遇される英語教育	
6 軍学協力による英語教育	
7 「英語センター」へのミシガン・ミッション関与	
8 英語教育の成否	
第3節 反米闘争の先頭に立つ琉大学生 .....	190
1 反米感情の高まり	
2 「第1次琉大事件」、「第2次琉大事件」	
3 米国パブリック・ディプロマシーへの反発	
4 ミシガン・ミッションが見た学生運動	
5 沖縄軍政の言論統制	
6 新しい沖縄アイデンティティーの創出	
第4章 「日米新時代」の琉球大学（後期ミシガン・ミッション） .....	232
第1節 アメリカ本国のパブリック・ディプロマシーと日米新時代 .....	232
1 ケネディー政権のパブリック・ディプロマシー	
2 「日米新時代」（パートナーシップ）をかかげる日米両政府	
3 対沖縄パブリック・ディプロマシーの新展開	
第2節 養子からパートナーへ .....	241
1 大学基盤の強化	
2 50年代パブリック・ディプロマシーの見直し	
3 琉球大学・ミシガン州立大学の協定	
4 「植民地大学」からの脱皮	
5 国益を担う民間財団	
第3節 米国派遣留学生制度 .....	266
第4節 ミシガン・ミッションの終了 .....	278
終章 .....	293
第1節 本研究を通じて得られた新たな知見・成果	
1 課題に対する結論	
2 対沖縄パブリック・ディプロマシーの構築過程	

- 3 対沖縄パブリック・ディプロマシーの担い手の多層性
- 4 対沖縄パブリック・ディプロマシーに対する沖縄側の選択的受容
- 5 意図せざる結果 沖縄アイデンティティーの変容

第2節 今後の課題

<付>

主要参考文献.....309

<凡例>

年号は主に西暦を用いた。

英語和訳は、本文、注釈に訳者の記述があるもの以外は、筆者の試訳によるもの。

本文中の〔〕内は筆者による補足や説明である。